



撮影=林 喜代種

活気溢れる疾走感や香り高い演奏など素晴らしい才能の登場による秀演

～アンドレア・バッティストーニ指揮東京フィルハーモニー交響楽団～

福田 卓也

を特別客演指揮者に迎えた。五月の定期演奏会には早速バッティストーニが登場、二種のプログラムの指揮した。オール・イタリア・プロによる、東京オペラシティ定期シリーズの演奏会を聴く。

バッティストーニは一九八七年ヴェローナ生まれ。二〇一三年一月よりジェノヴァのカルロ・フエリーチェ歌劇場の首席客演指揮者を務め、世界的に急速に頭角を現してきている新進気鋭のオペラ指揮者である。日本では二〇一二年二月に東京二期会公演「ナブッコ」で目の覚めるような演奏を聴かせ、ピットに入っていた東フィルの定期にも一三年五月に初登場、一四年一月にも客演して大成功を収め、今回のポスト就任に繋がった。今年二月には二期会に再登場して「リゴレット」を振り、大きな話題となったのは記憶に新しい。

オーケストラのドライブが巧い。全ての音符にイマジネーションが吹き込まれ、活気溢れる疾走感が鮮やか。オペラを得意とする東フィルとの相性も良く、既に息がぴたりと合って快調な滑り出し。

前半二曲目はヴェルディの歌劇「シチリア島の夕べの祈り」より舞曲。バレエ音楽「四季」として知られる曲である。この作品もヴェルディがパリのために書いたフランス語のオペラで、前曲に続いてイタリアオペラの大作曲家が書いたフランスオペラが並べられている所に、バッティストーニの選曲のセンスの良さが窺える。演奏はヴェルディ円熟期の充実した書法と、フランス向けの色彩感を十全に表出した見事なもので、なによりバッティストーニの指揮にオペラ指揮者らしい、本能的な劇場感覚が横溢しているのが聴きものだ。

「シチリア島の夕べの祈り」の踊り」と「饗宴の踊り」のホールを埋め尽くす轟々たる大音響を完璧に制御する一方で、アラビア風のエキゾチックで妖しい雰囲気も存分に表現されていて魅力的。東フィルも柔軟な機動性とパワフルな迫力を兼ね備えた秀演であった。

後半二曲目は、プッチーニの交響的前奏曲。作曲者の最初期の管弦楽曲で、若書きながら後の名作オペラを予感させる旋律美に満ちた佳作。バッティストーニの指揮は、イタリア人ならではのカンタービレが美しく、満開の花が咲き誇るような香り高い演奏となった。最後は、レスピーギの組曲「シバの女王ベルキス」。作曲家晩年のバレエからの抜粋で、最近では吹奏楽でも人気が高い。この日は演奏効果を考慮して、二曲目と三曲目を入れ替えて演奏された。旧約聖書から題材を採った絢爛たる音の絵巻物で、極彩色のオーケストラレーションを、バッティストーニは圧倒的なテンペラメントで捌いて行く。「戦いの踊り」と「饗宴の踊り」のホールを埋め尽くす轟々たる大音響を完璧に制御する一方で、アラビア風のエキゾチックで妖しい雰囲気も存分に表現されていて魅力的。東フィルも柔軟な機動性とパワフルな迫力を兼ね備えた秀演であった。

オペラハウスとコンサートホールとの両方を熱狂の渦に巻き込む素晴らしい才能の登場であり、東フィルとの今後の活躍を大いに期待したい。

(五月二十一日 東京オペラシティコンサートホール)

東京フィルハーモニー交響楽団は、二〇一五

一六シーズンより、イタリア出身の若手指揮者、

アンドレア・バッティストーニを首席客演指揮者

に、ロシア出身の名匠、ミハイル・プレトニョフ